

## 吉蔵『観経義疏』にみられる韋提希

——善導の「夫人是凡非聖」をめぐる——

小田切賢祐

### 一 はじめに

『観無量寿経』（以下『観経』）を見た場合、韋提希の立場は王妃でありつつも実子である阿闍世太子に幽閉された境遇にある。所謂「王舎城の悲劇」と呼ばれる出来事の中で幽閉された韋提希の請いを聞き入れて、釈迦牟尼仏が極楽浄土へ往生するための法を説き示すのである。

この様な『観経』の中心人物である韋提希について、善導大師（六一三～六八一、以下尊称略）の見解と、それ以前に注釈書を著した諸師の解釈に相違があることは周知の通りである。<sup>①</sup>善導においては「玄義分」に所謂「諸師解」に対する種々の論破があるが、特に韋提希に関して言えば「序分義」で「夫人是凡非聖」<sup>②</sup>と言明している点にある。すなわち、善導はどこまでも經文通りの「凡夫」と定めているのである。この善導の釈義には、諸師の解釈を挙げることが無いために論破も無い。そして、諸師の解釈が従来から韋提希を菩薩の化現とし、得忍後の階位について高く判じていると見られているため、<sup>③</sup>単に諸師の位置付けに対する言及とのみ思える点もあるが、決して

これだけでは無い。善導においての韋提希に対する解釈は、自己も含めた未来世一切衆生・九品往生人と同一の凡夫としたものである<sup>(4)</sup>。また、自らが『観経』の所説により往生浄土を目的とする主体的な解釈の上で浄土教の真意を究明した注釈である。したがって、善導にとって韋提希を凡夫と定めることは、相対的にどこまでも仏力に重点を置くことになり、指方立相や本願念仏などの根底となっているものである。

ここで、一方の善導以前の諸師の解釈として、嘉祥大師吉蔵（五四九～六二三、以下吉蔵）の『観無量寿経義疏』（以下『観経義疏』）に目を向けてみると、実際そこで韋提希の位置付けが明確に述べられているわけではない。吉蔵は、韋提希の他に頻婆娑羅王と阿闍世を含めた三人について、各々に「本迹二門」を立てて説明を施し<sup>(5)</sup>、これを前提に『観経』を解釈している。しかしその具体的な内容については、先学によって明確にされているわけではない。この指摘は、浄影寺慧遠（五二三～五九二）や天台大師智顗（五三八～五九七）の釈義、更には道綽（五六二～六四五）の釈義が善導と共に挙げられることに比べ、吉蔵のものが特に示されることが無いことによっても明らかである<sup>(7)</sup>。そこで本論考は、まず吉蔵が『観経義疏』の中で実際に韋提希を如何に解釈しているのかを明らかにしようとするものである。

そもそも、問題は韋提希に関する事柄だけでは無い。諸師の解釈には、当然それぞれの教学に基づく観点の違いや意図があつたわけであり、<sup>(8)</sup>『観経』をどの様に解釈することも確かに可能なことである。そこで視点を交えるならば、善導の教学を究明する上においてはもちろん、更に善導の釈義が形成された背景を探る上からも、諸師の見解を把握する必要がある。その意味においても、特に『観経』における対機としての韋提希について、善導以前の諸師に目を向けることは意義あるものと言えよう。

この様な事情から、本論考では『観経』所説の韋提希に対する吉蔵の解釈に焦点を絞り、如何に位置付けている

のかを考察する。また同時に、善導が「夫人是凡非聖」と言明した背景についても、吉藏の解釈を明らかにしながら改めて確認することを目的とする。

## 二 吉藏の韋提希をめぐる中心問題

吉藏が韋提希を取り上げている箇所は、「六門明義」<sup>(9)</sup>の中で「序王第一」や「弁宗体第三」にも見られる。しかし、随文解釈に至るまで特に論じられているのが「論緣起第六」の冒頭においてである。そのため、まずはここから問題を探りながら見てみることにする。

本質的に、本迹二門を設けた見地から解釈されているが、その内容について、まず三人の「迹」に対する見解から順を追って検討してみよう。今これをまとめると、およそ次の様になる。<sup>(10)</sup>

### (人物)

### (所益)

頻婆娑羅	——	発経之緣由	——	少・浅
韋提希	——	説経之主	——	多・深
阿闍世	——	滅罪之緣由	——	甚多・最深

これを見ると、三人の所益を指しているのが分かる。つまり、他の者にそれぞれ利益を与えることが三人の「迹」における共通点として示されているのである。ただし、ここで頻婆娑羅と韋提希について「発経之緣由」や

「説經之主」としてゐることは、確かにその様に考えられないわけでは無い。しかし、そこまで言い切つてゐることは疑問を抱かざるを得ない。また、頻婆娑羅と韋提希の二人については、一応『觀經』の經文に則して述べられているが、残る阿闍世に関しては『觀經』に全く見られない事柄を示し、しかも、最も利益を与えた存在としてゐるのである。この辺りは、三人が實際に他に与えた利益を示したかつた吉藏の意図を伺うことができる。

一方、「本」に對する説明としては、次の様に述べてゐる。

然尋三聖意趣相與齊等。何者若非父王無有殺父之逆。則無以接作逆之人。子若不逆罪則父王無有感佛發經之緣由。母若不以麁奉王則不被所禁。以何因緣使没出得開此經。故宮内現蒙勝益。是以三聖共爲方開經。故云三聖意趣齊深也。<sup>11</sup>

「意趣相與齊等」とあり最後に「故云三聖意趣齊深也」と述べられていることから、本迹二門が分けて述べられている内、この部分がすべて本門に当たすることは明らかである。ところが、ここに述べられている事柄は單純に納得することのできない説明である。なぜなら、これは『觀經』の説相からした結果を前提として述べているという他無いのである。何も釈迦牟尼仏の説法に對して「三聖共爲方開經」とする必要は無いであらうし、三聖とすると阿闍世の惡業に對する説明が付かない。確かに『觀經』では、韋提希が釈迦牟尼仏に説法を請うに至るまで、所謂「王舍城の悲劇」という一連の流れがあり、その流れがあつたからこそ釈迦牟尼仏によつて教法が説かれる展開をなしている。けれども、それを「三人が共に『觀經』を開く」とするのは、如何なる意図によるものであらうか。これは、先程の迹についても同様のことを言い得る。

吉藏が「本迹二門」を立てて、これによつて説明しているのは三人についてだけでは無い<sup>12</sup>。そのため、ごく自然な用い方であつたものと伺うことができる。しかし、三人を「三聖」と称し、意趣無異と淺深とを本迹に當てて説

明をしている一段が「六門明義」の中にある限り、『観經』の中の三人に対する見解の本質を表していることは明白である。したがって、本迹二門を立てて説明している吉藏の意図を中心に考えなければならない。

### 三 別選所求における位置付け

善導においては、韋提希をどこまでも現実の衆生であつて凡夫とする。そのため、吉藏の本迹二門を設けた見解が自説に反していたことは当然である。では先程の問題を含め、韋提希と他の二人に本迹があるとした吉藏が、随文解釈においてはどの様に言及しているのだろうか。特に韋提希について、以下に善導との関係を考えながら、經文に沿つて考察を進めて行くことにする。

まず、韋提希が釈迦牟尼仏によつて示された十方淨土の中から極樂淨土を選ぶところである。そこで吉藏は、次の様に説明している。

問佛普現十方淨土。夫人何意願生西方阿彌陀耶。解云如華嚴所辨。百萬阿僧祇品。淨土西方彌陀最是下品。既是下品何故願往生耶。解云始捨穢入淨餘淨不易可階。爲是因緣唯得往生西方淨土也。<sup>13</sup>

韋提希が極樂淨土を選んだ理由として、『華嚴經』の所説に基づいて極樂淨土を最下品に位置付ける。<sup>14</sup>そして、初めて穢土から淨土へ往生する場合、極樂淨土以外は往くことが困難であるとし、だからこそ極樂淨土を選び求め、そこへ往生することができるとしている。ところがこの説明によると、韋提希が次の二点を予め知っていたことを意味しているのである。一つは、極樂淨土が最下品のものであること。もう一つは、自分は最下品の淨土のみに往生が可能であること。すなわち、これらを韋提希が把握していたことが前提とされた説明なのである。

もちろん『觀經』の所説に従い、釈迦牟尼仏が示した十方淨土の中から極樂淨土を選んだのは韋提希としている。しかし、往生する世界としての淨土に位があり、それを韋提希が自ら選ぶとすれば上品の淨土を選ぶとする方が適切なはずである。それにも関わらず下品を選んだとしていることは、やはり韋提希が予め先程の二点を把握していたものと見てるのである。このことは韋提希に意図を持たせていることになるが、如何なる事情によるのであろうか。ところが一方では、初めて穢から淨へ移る存在としている限りにおいて、ここでの韋提希を凡夫と位置付けているのである。この様に、韋提希を本迹二門で解釈する傍ら、最下品である極樂淨土に意図を持つて往生する凡夫と見ているところに複雑な問題が含まれるのである。この点については、すぐに判断することはできない。

ちなみに淨影寺慧遠は、韋提希が極樂淨土を選んだことについて、今の場合は最も勝れた淨土を選んだとしており、これは善導も同様である。すなわち、韋提希を選んだ理由について善導は、

正明夫人總領所現感荷佛恩。此明夫人總見十方佛國。並悉精華。欲比極樂莊嚴。全非比況。故云我今樂生安樂國也。問曰。十方諸佛斷惑無殊。行畢果圓亦應無二。何以一種淨土即有斯優劣也。答曰。佛是法王。神通自在。優之與劣非凡惑所知。隱顯隨機望存化益。或可故隱彼爲優獨顯西方爲勝。<sup>16</sup>

と述べている様に、今は釈迦牟尼仏によって極樂淨土が勝れた淨土として示されたとするのである。そして、次の様に続けている。

正明夫人別選所求。此明彌陀本國四十八願。願願皆發增上勝因。依因起於勝行。依行感於勝果。依果感成勝報。依報感成極樂。依樂顯通悲化。依於悲化。顯開智慧之門。然悲心無盡智亦無窮。悲智雙行即廣開甘露。因茲法潤普攝群生也。諸餘經典勸處彌多。衆聖齊心皆同指讚。有此因緣。致使如來密遣夫人別選也。<sup>17</sup>

極樂淨土は、法藏菩薩が菩薩行を修して、他と比べて最も勝れた淨土を建立したという『無量壽經』の所説に立

脚するのが善導の立場である。そうすると、吉蔵において韋提希が最下品と理解した上で極樂淨土を選んだと述べられていることには、『華嚴經』の所説も含めてこれに對しなければならなかったわけである。そのため、善導は釈迦牟尼仏の方から最も勝れた世界として極樂淨土を示し、これを韋提希に選ばせたとして退けるのである。ここで善導が「何以一種淨土即有斯優劣也」、また「隱彼爲優獨顯西方爲勝」と述べているにも関わらず、片方で「諸餘經典勸處彌多。衆聖齊心皆同指讚」としているのによると、主体的に極樂淨土を勝れた世界として位置付ける上での苦心を伺える。また『華嚴經』に對しては、自身の『無量壽經』に依つて立つ立場から述べている背景を知ることができるのである。いずれにしても、極樂淨土を最も勝れた世界とするために諸師の説は退けなければならなかったわけである。したがって、同じ箇所における吉蔵の見解については、一段と意識していたものと思われる。

更に別選所求に関する事柄として、善導は直前の部分の矛盾点に言及している。すなわち、韋提希が釈迦牟尼仏に對して説くことを求めたにも関わらず、釈迦牟尼仏の対応は、説くこと無く十方淨土を現した点を取り上げて、次の様に自問自答しているのである。

問曰。韋提上請爲我廣說無憂之處。佛今何故不爲廣說。乃爲金臺普現者有何意也。答曰。此彰如來意密也。然韋提發言致請。即是廣開淨土之門。若爲之總說。恐彼不見心猶致惑。是以一一顯現對彼眼前。信彼所須隨心自選。<sup>⑩</sup>

この様な指摘は淨影寺慧遠には無く、吉蔵のものに限つて何うことができる。ただし吉蔵の場合は、問いと答えが不一致であるのを指摘しているに過ぎない。<sup>⑪</sup> そうすると、善導は吉蔵の指摘に基づき、これに道理をもつて説明を施している様である。

善導が自説を形成する上で、吉蔵の説を退けている部分もちろんあるが、道理として取り入れる方向で見ている場合もあることが伺え、諸問題を解決しながら自説が展開されていると知ることができるのである。

#### 四 釈迦牟尼仏による凡夫の表明と得忍後の階位

經文の流れからまず別選所求を見たが、周知の通り『觀經』の中では、釈迦牟尼仏によって「韋提希は凡夫である<sup>(21)</sup>」と表明されている。そして、他でも無く凡夫であるために、極樂淨土の具体的な莊嚴を釈迦牟尼仏が「異方便」によって見させるのである。諸師それぞれの立場はもちろん、この部分と得忍や往生業、広くは『觀經』全体との関わりによって各々の見解に相違があるのである。

この釈迦牟尼仏の言明に対する吉蔵の釈義では、何ら特別な見解を示しておらず、

佛告韋提希汝是凡夫者第五重告韋提希。明如來方便令韋提希得見淨土也。<sup>(22)</sup>

と忠実に説明している。つまり吉蔵は、本迹二門はあれ、王舎城で説法を受ける韋提希に対して、仏土の中で最下品の極樂淨土を選んでいるのと同様に凡夫としていたのである。そして同時に、韋提希は釈迦牟尼仏の方便によってこそ淨土を見ることができると理解しているのである。事実、「論緣起第六」の中では「偏爲思惟夫人感佛說<sup>(23)</sup>」と述べているし、これに類することを至るところで述べている。<sup>(24)</sup>したがって、改めて吉蔵の述べる本迹二門の内容が問題となるわけである。

ここで、淨影寺慧遠の同じ箇所を挙げて、具体的に対照させてみたい。

告韋提希汝是凡夫彰其分齊。不能遠觀彰所不堪。韋提夫人實大菩薩。此會即得無生法忍。明知不小亦化爲凡。



心想劣等正明不堪。心想羸劣明心不能遠照彼土。未得天眼明目不能遠見彼國。有異方便令汝得見明已巧示。此即略顯說之相也。教觀此方日水等事令知彼方名異方便令得見矣。<sup>25</sup>

淨影寺慧遠によると、韋提希は釈迦牟尼仏から「凡夫」と称されているけれども、この会座でたちまち無生法忍を得るから「実の大菩薩」であると定める。ただし吉蔵と同様に、釈迦牟尼仏から説法を受ける場での韋提希が凡夫であることは、「不能遠觀彰所不堪」と述べていることから明らかである。また、『觀經』を「韋提希のために説かれた凡夫のための經」<sup>26</sup>と定めていることによっても明確である。

そもそも、ここで凡夫と称されていることで主眼とすべき点は、韋提希が淨土を見る見ないであつて、それが韋提希の能力・機根とどの様に関わりあるかという点にある。善導はここで「夫人是凡非聖」の一段を述べているが、これは「聖力冥加」とある通り、主として仏力によつてこそ見られることを意図したものである。今一度示すと、次の様にある。

正明夫人是凡非聖。由非聖故仰惟聖力冥加。彼國雖遙得觀。此明如來恐衆生置惑。謂言夫人是聖非凡。由起疑故即自生怯弱。然韋提現是菩薩。假示凡身。我等罪人無由比及。爲斷此疑故言汝是凡夫也。<sup>27</sup>

つまり善導においては、釈迦牟尼仏の力が加わらなければ極樂淨土を見ることができないことからして「凡夫」としているのである。もちろん、見ることができれば聖者というのでは無い。これは、淨影寺慧遠や吉蔵も同様であり、一応それぞれ韋提希に二面性を持たせているが、「聖者であるから見ることができ」とは両者も述べてはいない事柄である。したがつて、善導が「夫人是凡非聖」と述べているのは、単にこれら諸師の二面性の見解に対することだけでは無く、更に別の意味を含んでいるものと考えなければならない。それは他でも無く、善導が述べている通り、どこまでも釈迦牟尼仏が衆生を配慮しているものと理解していることであり、衆生は仏力によつてこ

と見る事ができるということである。単に諸師の二面性を持った見解に対する主張というだけでは、善導の意図とやや異なることになる様に思える。

一方、善導と諸師との相違として、韋提希の得忍後の階位を定めている問題がある。淨影寺慧遠は、韋提希が聞法した後に得た無生法忍について、その階位を示して七地以上の無生法忍とし、善導は無生法忍を信忍と定めている<sup>(29)</sup>。しかし吉蔵の注釈においては、本迹二門や聖と述べられてはいるが、菩薩と断言している箇所を見ることはできない。更に、九品の往生人の階位に関しては述べているが、韋提希の得た無生法忍については何ら言及しておらず、階位も定めていないのである<sup>(30)</sup>。そうすると、吉蔵は如何に見ていたものと考えられるであろうか。検討の余地はあるが、これには続いて全体を眺める必要がある。

ともかく、『觀經』にみられる韋提希をどの様に位置付けるかということと、そこに説かれる往生業が如何なる者のためか、極樂淨土に往生する衆生の機根・能力がどうかとは個別の問題である<sup>(31)</sup>。吉蔵においては、韋提希に本迹二門があり方便であつても、その会座における説法の対象は、最下品とする極樂淨土のみに往生が可能なる凡夫韋提希なのである。したがって、善導が韋提希を凡夫と定めたことが、如何に「常没の衆生のため」<sup>(32)</sup>のものであり「凡夫のための經」であることを明確にし、かつ徹底したものであるかを改めて知ることができるのである。

## 五 善導の「華座觀」冒頭部分との関連

更に加えて、韋提希の得忍に関する事柄として、いつ得忍したのかという問題がある。經文に素直に従えば十六觀を説き終わった後になるが、周知の通り、善導は第七觀とした内の冒頭部分であるとする。また、それが後に得

益分として別出されたとしている。<sup>(33)</sup>

これに対して吉蔵は、善導が第七観に含めた部分について「観方便」と位置付け、「観正体」とする以降とは切り離して見ている。<sup>(34)</sup>そして、中でも阿弥陀仏・二菩薩が空中に現れたことについては、

無量壽佛及二菩薩現韋提希前。所以佛菩薩現其人前者爲觀之境。彼將欲作無量壽佛及二菩薩觀。是故佛及二菩薩現其人前作觀之境也。<sup>(35)</sup>

と述べている様に、韋提希の願い求めに応じたものと理解しているのである。

善導も同様に、韋提希の願いを知って阿弥陀仏が自ら出現したものと解釈して、次の様に述べている。

正明娑婆化主爲物故住想西方。安樂慈尊知情故則影臨東域。斯乃二尊許應無異。直以隱顯有殊。正由器朴之類萬差。致使互爲郢匠。言說是語時者。正明就此意中即有其七。一明告勸二人時也。二明彌陀應聲即現。證得往生也。<sup>(36)</sup>

これに関しては、淨影寺慧遠が「釈迦牟尼仏によつて現された」と述べているのを見ると、吉蔵の影響が大きい様である。ただし善導によると、阿弥陀仏の方から現れたが、それを見ることができたのは韋提希の力によるものでは無く釈迦牟尼仏の力によるものであると、經文に先立つて強調しているのである。<sup>(37)</sup>しかし、吉蔵は先程の後に続いて、

韋提希因見佛及二菩薩。故爲未來衆生而作無量壽佛及二菩薩之觀也。<sup>(38)</sup>

と述べるのみで、經文に「仏力」とあることについて特に取り上げていない。ところが、この部分には他に未來世衆生との関係における問題が含まれている。すなわち吉蔵によると、韋提希によつて「未來世衆生は如何に觀ずるのか」と問われている内容は、その者のために觀をなすことが示されていると言うのである。つまり、これ以後の

第七観から第十三観までの七観は、韋提希が意図を持って未来世衆生のために観法を行うとしているのである。

そもそも『観經』での韋提希は、自分と未来世衆生のために極樂淨土の莊嚴を觀ずる方法を願ひ求めているのであつて、未来世衆生のために觀をなすことなどあり得ない話である。しかし、吉藏はこの部分を觀方便とし、韋提希が未来世衆生のために觀ずると見ているわけである。<sup>(40)</sup>ここに如何なる背景があるのか。前に見た別選所求と同様、韋提希に何らかの意図を持たせているが、その位置付けとも関わっていることを伺うことができる。

善導の述べる第七観の冒頭部分が、なぜその第七観に含まれたのかという内容も含め、韋提希がこの部分で得忍したと見ていることは善導独自のものである。今これについて、善導が如何なる理由でその様に理解したのかは本論考の主題と異なるので避けるが、<sup>(41)</sup>しかし阿弥陀仏の方から出現したものと定めたことは、吉藏の説を受けて形成されていると言うことができる。一方の吉藏の釈義において、韋提希が意図を持っている様な表現は、更に全体を眺めた上で再考したい。

## 六 その他にみられる韋提希および未来世衆生

これまで、善導と関わり深い箇所を取り上げてきたが、吉藏は他の箇所において如何に見ているであろうか。一応、全体を見ておく必要がある。

まず「執母因縁」が説かれているとする一段では、「阿闍世が大臣の忠告を受けて、母である韋提希を殺すことなく宮内の奥深くに捕らえた。それにより母が仏を念ずることになり、仏を念じたからこそ釈迦・無量寿の二仏を見る<sup>(42)</sup>ことができた」とする。この阿闍世の行為を指して「此則是大利益事善權方便」と述べ、悪事を行ったからこ

そ「浄土の法門」が説かれたとしている。ここでは「論縁起第六」と異なり、母を殺さなかったところまで遡って、阿闍世の行為について善權方便としている。

また同様の事柄ではあるが、他に二点を挙げるができる。一つは、「阿闍世が悪人を誡め、浄土の法門を開き、經の力用を示すため意図的に悪事を行った。これによって父母は苦を受けているが、これは仮りの姿であり、同時に世間の人々と同じ様に利益も受けている」と述べている点。もう一つは、「阿闍世が頻婆娑羅と韋提希を捕らえる方便が彼らに利益を与えることになった」とある点である。これらが、ひとまず未來世衆生への言及を除く部分で、三人に対する吉藏の見解である。すでに見た經文の「汝是凡夫心想羸劣」に対する説明以外は、ことある毎に方便としていることから、本迹二門で三人を理解する一貫した考えを知ることができる。

そうすると「論縁起第六」で見た本迹二門とは、そこに述べられている通りに利益を指し示しての浅深であり、開經を指しての意趣無異であり、聖ということで間違いない。そして、たとえこれが結果論であるとしても、隨文解釈で方便としているから本迹二門とは矛盾していないわけである。

今は特に韋提希に関する見解を取り上げてきたが、次に未來世衆生と韋提希との関わりを吉藏が如何に理解しているのかを見て行くことにする。これによつて、本迹があり方便とも位置付ける韋提希に対して、更に別の角度から解釈を探ってみよう。

吉藏は「論縁起第六」の中で、

若雙卷經者雖阿難與彌勒爲說。而通一切大衆說耳。故三界大衆悉爲對揚人。今此經唯以三聖發經之主。而偏爲思惟夫人感佛說經也。<sup>46</sup>

と述べている様に、『無量壽經』が「一切大衆」や「三界大衆」に対して説き示されているという見解に対し、一

方の『観經』では「韋提希」のみを取り上げて説法の対象とする。確かに『観經』において、釈迦牟尼仏に説法を請い求めているのは韋提希であり、説法の直接の相手である。しかし加えて、善導が主体的に把握する未来世衆生も示されており、阿難も会座を共にしているのである。そのため、吉蔵がここで「偏爲思惟夫人感佛說經」とのみ述べて「未来世一切衆生」に言及していない事情については、しばらく検討して見る必要がある。いわば、直接・間接に関わらず、説法の対象を如何なる意図で見ているのであろうか。またこれは、韋提希との関係において『観經』をどの様に見ているのかとも関わる問題である。

『観經』の中で、韋提希以外の不特定の大衆に相当する未来世衆生が最初に説かれる箇所を見ると、それは釈迦牟尼仏の方から初めて示されるのである。<sup>(47)</sup>これについての吉蔵の解釈には、

亦令未來世下明說之意。所以說者爲欲利益現在未來衆生故也。<sup>(48)</sup>

とあり、釈迦牟尼仏が現在・未来の衆生に利益を与えようして往生業を説く、その意趣が表明されているとする。吉蔵はこれを三福を説く縁起としているが、更に十六觀を説く縁起とする箇所でも、

如來今者爲未來世者。第二釋說淨業之意。何意說此淨業耶。爲未來世一切衆生故說此淨業也。<sup>(49)</sup>

と述べ、未来世一切衆生のために釈迦牟尼仏が淨業を説くとして、ここでも同様に説意を示しているとする。この「說之意」や「說淨業之意」とは、釈迦牟尼仏が經典を説く上での「意」に他ならない。したがって「説教被縁迹佛之用。修習觀門偏示不悟也。」<sup>(50)</sup>や「說是吐教彰理名之爲說。」<sup>(51)</sup>と述べている様な、未来世衆生を悟りの世界である「理」に導くために、釈迦牟尼仏が「教」である淨業を説いたということである。

これらの内容からすると、吉蔵は未来世衆生を対象として念頭に置いている様である。では「論縁起第六」で韋提希のみを説法の対象として取り上げていることとの矛盾は、如何なる事情によるのであろうか。未来世衆生との

関わりで注目すべき事柄として、吉蔵は「釈迦牟尼仏が韋提希の問いに対して誉めているのは、それによって淨業を説くことになり現当の二益が導かれるため<sup>(52)</sup>」としている。つまり韋提希の問いが、自分はもちろん五百の士女や未來世衆生に利益を与えているとし、韋提希に対して利益を与えた存在と見ているのである。韋提希の問いが他の者に利益を与えているといった見方は、「論緣起第六」の本迹二門で取り上げている事柄と同じものとしてよい。ところがこの様に見てみると、吉蔵が未來世衆生に対してどの見地から説法の対象としているのか、これは韋提希が未來世衆生に利益を与えると見なしている点を考慮しなければならぬ。そのため、韋提希の位置付けを具体的に定めなければ、明確に判断することはできないわけである<sup>(53)</sup>。

## 七 本迹二門と韋提希の位置付け

韋提希に関する部分を全体的に見てきたことにより、およそ「論緣起第六」にある通り本迹二門があり、方便という一貫した考えを伺うことができた。そして、韋提希と釈迦牟尼仏、韋提希と未來世衆生との関係も指摘することができたと思う。そこでこれから、吉蔵の述べる「本迹二門」について再考してみよう。「明淨土第五」の中で仏土論を展開しているが、極樂淨土に関して次の様に述べている。

若就通門爲論無非酬因可云報土。別門不然。何者以法藏菩薩有本迹二門。就迹爲論在凡夫地以願造土可云報土。故雙卷對阿難言成佛以來已逕十劫今在無量壽世界。若論本門此菩薩位居隣極無更造業。唯是應現依正兩報。故雙卷云成佛今時七寶爲地自然而生。(中略) 故知應土亦是分段<sup>(54)</sup>。

極樂淨土をどの様に位置付けるかという仏土の問題はともかく、今はその本迹二門の用いられ方を探ることに重

点を置く。ここで吉蔵は、法蔵菩薩について本迹二門があるとし、最終的に応土であると定めている。しかしこの説明を見ると、別に極楽浄土が複数あるわけでは無いのが分かる。また続けて、

問雙卷則云應云報土耶。答此是應中開應報兩土。非是異應別有報土。何者一往辨土體謂之爲報。於此報土示種種七寶爲應土也。非是酬因之報故爲報土也。若就所化修因往生義爲論。可爲報土。然所化由因往生應土中也。<sup>(55)</sup>と述べている様に、応土と定めつつも、それを所化の往生の義からすればそのまま報土であるとしている。すなわち、極楽浄土という一つの対象を異なる観点から言い表しているに過ぎないのである。

ではこの見方に従うと、『観経』全体として韋提希を如何に見ていたものと考えられるであろうか。本迹二門で韋提希を位置付けていることからすると、同様のことが言える。

いわば、吉蔵は三人について、すでに見た通り結果的なものが前提にある見方をしている。しかし、特に韋提希に関して言ってみれば、その様な本迹二門がある姿とは、これも異なる観点から言及されているに過ぎないのである。すなわち、王舎城に権化を示した韋提希の方便・利益とは、衆生の側から見るからこそ「結果論」なのであって、これを仏の側から見ると、どこまでも「方便」であると言うことができよう。つまり、これが韋提希に対する吉蔵の見方であると考えられる。韋提希の記述において、経文に特別な解釈を示すことが無い場合や意図を持ってある様な説明も、すでに韋提希は迹であり方便であることが「論縁起第六」の通りに前提としてあったためである。よって、韋提希が経文のままの凡夫であれば、教えである正宗分の内容の「三福・十六観」を釈迦牟尼仏に説かせることはあり得ないし、他を益することも無いという事情なのである。換言すれば、悟りの世界である「理」に導くための「教」、これを釈迦牟尼仏に説かせた存在として着目していることに他ならないのである。分科をする上で釈迦牟尼仏とのやりとりを境にして厳密に区切っているのも、このためであると考えられる。<sup>(56)</sup>



また、先にも見た様に、迹とは「説教被縁迹佛之用。修習觀門偏示不悟也。」と、その「用」を取り上げて、三人に対して衆生を悟りに導くための位置付けと見ているのである。もちろん、吉蔵のいう『觀經』所説の三人は、単なる迹であつて迹仏では無い。しかし、韋提希を本迹二門で理解している限りに於いて、衆生を悟りの世界へ導く「迹としての行為」や「三聖の意趣」に着目しているわけである。これに従うと、従来より述べられている様な「菩薩」であるどころか、説法こそしていないが本門は言葉や姿を絶した「理」そのものであり、また迹門では法界より応現した化仏・化菩薩が「凡夫」と称されていることになる。具体的に吉蔵は明言をしていないが、行為や内容そのものを指せば「仏」に相当すると理解していたものと思える。

## 八 まとめ

以上、吉蔵の『觀經義疏』における韋提希の位置付けを明確にするに当たり、三聖と称される韋提希と他の二人とを合わせ、吉蔵の見解・意図を考察してきた。全体の流れを含めて見解をまとめた。

所謂「王舎城の悲劇」は、一般的に見る限り現実の事柄であり、韋提希をはじめ他の者も現実の存在である。そもそも、吉蔵がこれに対して「本迹二門」を設けて解釈しているところに、韋提希の位置付けを究明する上での複雑な問題が含まれるのである。つまり、吉蔵は「論縁起第六」において「本迹二門」の意義を立て、迹門では經文の中での益する所の浅深、本門では『觀經』所説の觀法が説かれることになったことでの意趣無異としていた。また、随文解釈では三人に対して方便であると説明していた。

今これについて、吉蔵の三人に対する見解が、一つは結果論になっていることを指摘した。これについては、先

程述べた通り「理」に導くための「教」を説かせた立場であることに他ならないからこそ、迹門において「説經の主」と見たのである。吉蔵の観点においてはその様に見るのが妥当であるとして、仏の側と衆生の側との両方に立ち、韋提希には「本迹二門」があるとし、「論縁起第六」に述べている様な理論を立てていると考えられる。つまり、開經に至らせた存在である韋提希とは、釈迦牟尼仏に悟りの世界へ導くための教法を説かせた存在であるから、その点に着目して他の二人と共に「聖」なのである。

さて一方で、善導にしてみれば、釈迦牟尼仏が「汝は凡夫心想羸劣」と述べていることに対して何ら吉蔵が言及していなくても、すでに本迹があり、権化であり、方便とされているのである。まして「經」を説かせた存在と位置付けているのであるから、「韋提希はどこまでも經文通りの凡夫である」と述べた背景に、吉蔵の見解が考慮されていることを伺えるのである。もちろん、この様な客観的な注釈が善導にとって容認できるはずは無い。

更に二つめとして、未来世衆生を説法の対象としていない問題である。三福・十六観は吉蔵にとつても、確かに目の前の韋提希と同時に未来世衆生のために説かれたものである。すると、未来世衆生も説法の対象とされているかの様である。しかし元を言えば、吉蔵が所々で述べている通り、韋提希と他の二人がいなければ教法は説かれることは無かった。つまり、吉蔵の言う「正宗分」が説かれなければ、未来世衆生は『觀經』の中に登場することは無いわけであり、すべては正宗分が説かれて以降の事柄である。そのため、韋提希の請いが釈迦牟尼仏を介することによって未来世衆生に利益を与えるといった流れを受け取ることににより、その元としての韋提希に着目しているのである。換言すれば、韋提希は未来世衆生のために所々で請い求めているから、未来世衆生・一切凡夫の側に入ることはできないのである。

この様な吉蔵の見方によれば、確かに説法の相手は嚴密に言つてどこまでも凡夫韋提希のみである。また実際に

『觀經』の得益で記されているのは韋提希であつて、未來世衆生は明らかに『觀經』の説法の會座に居合わせていないわけであるから、その意味においても吉藏が一線を引いているのは經文に反しているものではない。一方、未來世衆生を導くのは、釈迦牟尼仏に受持を命じられた阿難なのである。そのことも、韋提希の請いを元にして經文に表れていると吉藏は見ているのである。

そうすると同時に、韋提希の得忍後の階位はどうかという問題そのものが的を得ていないことになる。吉藏が三人を發經の主と述べ、何をしたのかという三人の所作に着目しているのを見れば、經文に見える韋提希の得忍後の階位は問題で無かつたと考えられる。いわば、韋提希を發經の主や說經の主と見た吉藏は、經文の中の「凡夫」であることの會通に、理論として「本迹二門」を用いて三人に言及しているのであり、更に本迹二門を立てることによつて諸問題を回避させている。事実、『觀經』を理解する上で阿闍世の所益については『觀經』以外を用いて示していることから言うことができる。阿闍世以外においても同様、他の經典でどの様な記述があつても、本迹二門を設ければ如何なる場合も何ら矛盾することは無い。この様に見ると、吉藏が韋提希の得忍後の階位を定めていないのも当然と言える。また淨影寺慧遠の様に、無生法忍を得ているから大菩薩と定めていることも、その位置付けは異なると知ることができる。

善導が述べる「夫人是凡非聖」とは、單に諸師が二面性を立てて理解していることに對してだけのものでは無い。善導の意図は、極樂淨土を最も勝れたものと定めることも含め、更に仏力を強調することによつて、「凡夫のため」であることを徹底させたことに他ならない。本論考は韋提希に関するこのみではあつたが、また一方で、善導が『觀經』を注釈するに当たり、その形成に吉藏のものが影響を与えていることも明確になつたと思われる。

註

(1) 善導以前の諸師については、藤田宏達『観無量寿経講究』（真宗大谷派宗務所出版部、一九八五年）六四～六七頁参照。また、善導と諸師との釈義の相違については、同書、六九頁参照。

(2) 「正明夫人は凡非聖。由非聖故仰惟聖力冥加。彼國雖遙得觀。此明如來恐衆生置惑。謂言夫人是聖非凡。由起疑故即自生怯弱。然韋提現是菩薩。假示凡身。我等罪人無由比及。爲斷此疑故言汝是凡夫也。」（『大正蔵』第三十七卷、二六〇頁下）

(3) 特に次のものを挙げることができる。結城令聞「観經疏に於ける善導釋義の思想史的意義」（『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』所収、塚本博士頌壽記念會、一九六一年）。大原性實『善導教學の研究』（永田文昌堂、一九七四年）二二一～二三頁。藤田前掲書、九三頁。

(4) 『大正蔵』第三十七卷、二四七頁下以降に述べられる、所謂「九品皆凡」。及び「如來說此十六觀法但爲常沒衆生。不干大小聖」（同上、二四九頁下）

(5) 『大正蔵』第三十七卷、二六七頁中

(6) 「然論三聖之迹有淺深之殊。論本意趣無異耳。」（『大正蔵』第三十七卷、二三五頁下）

(7) 智顗のものについては後人の仮託とされる（佐藤哲英『天台大師の研究』百華苑、一九六一年、五六七～六〇一頁参照）。

(8) 本質的な相違は、主観的解釈と客観的解釈にあると言い得る。

(9) 『大正蔵』第三十七卷、二三三頁下。「六門明義」とは吉蔵が用いている語である。以下この「六門」については、この部分で列挙されている名称を用いる。ちなみに「序王第一」が、その前（同上、中～下）で「無量壽經序」とさ

れている序文を指すことは明らかである。

- (10) 原文は「頻婆娑羅王爲子所禁密感於佛作發經之緣由證阿那含所益爲少可爲淺矣。夫人被害深懷厭苦感佛懺悔。正說經之主。所將五百仕女令發菩提心得往生淨土之記。自身大悟無生法忍。亦得往生安養世界所益者多。可云深也。世王以害父故生重悔心。將摩訶陀國諸人民等向拘尸那城至於佛所。爾時他方恒沙大衆如針鋒處同在聞法不相妨礙。爲一切作逆罪人及四重罪等滅罪之緣由故所益甚多最爲深也。」(『大正藏』第三十七卷、二三五頁下～二三六頁上)

- (11) 『大正藏』第三十七卷、二三六頁上

- (12) 「明淨土第五」にも法藏菩薩について述べる上で用い(『大正藏』第三十七卷、二三五頁上)、またその前の「論因果第四」では「第三師云」として他者の説を引用しているところにも見られる(同上、二三四頁下～二三五頁上)。更に十六觀の中で「想像觀」とする第七、八觀、また想像觀に対して「真實觀」とする第九、十、十一觀の説明をする上でも用いている(同上、二四三頁下)。

- (13) 『大正藏』第三十七卷、二四一頁上。尚、『大正藏』では「即是下品何故願往生耶」となっているが、底本(徳川時代刊宗教大學藏本、以下同)と見比べると「即」は「既」の誤植である。どちらでも意味は通じるが、底本に従うべきである。

- (14) 『華嚴經』「壽命品」(六十卷本、『大正藏』第九卷、五八九頁下)の所説に基づいて極樂淨土を最下品と称していることから、「百萬阿僧祇品」は「百萬阿僧祇世界」の意味であろう。すなわち「百万阿僧祇世界の淨土の中で極樂淨土は最下品の世界」という意味であると思える。

- (15) 「問曰韋提樂生安養。何不望直爲現彼國而通現乎。若不通現無由得顯彌陀最勝增其深樂故。故通現之。」(『大正藏』第三十七卷、一七八頁上)。ただし、極樂淨土は劣った世界(同上、一八二頁下)とするのが本意の様である。

(16) 『大正蔵』第三十七卷、二五八頁中

(17) 『大正蔵』第三十七卷、二五八頁中。ただし「玄義分」では「過因韋提致請我今樂欲往生安樂。」(同上、二四六頁中)と述べていることから、ここでは明らかに具体的な諸師の解釈に対するものと知ることができる。

(18) 「唯願世尊。爲我廣說無憂惱處。」や、或いは「唯願佛日教我觀於清淨業處。」(共に『大正蔵』第十二卷、三四一頁中)

(19) 『大正蔵』第三十七卷、二五八頁中

(20) 「爾時世尊下第二總答。所言總答者。直放光明化爲金臺。令十方淨土皆於中現。使韋提希夫人普皆觀見。令彼隨意往生。則是總答。答前問。然此答與前問異。前問則發言問。今則放光答。前聲問今色答也。」(『大正蔵』第三十七卷、二四一頁上)。尚、『大正蔵』では「前聲聞今色答也」となっているが、底本と見比べると「聞」は「問」の誤植である。『大正蔵』のままでは意味が通じない。

(21) 「汝是凡夫心想羸劣。未得天眼。不能遠觀。諸佛如來有異方便。令汝得見。」(『大正蔵』第十二卷、三四一頁下)

(22) 『大正蔵』第三十七卷、二四二頁上〜中

(23) 『大正蔵』第三十七卷、二三五頁下

(24) この他に「序王第一」の「夫人遇此惡緣厭累苦之世欣勝樂之地」や「夫人情感安養極樂。如來廣說淨土依正勝果正業妙因。」(共に『大正蔵』第三十七卷、二三三頁下)、また「弁宗体第三」の「爲夫人示淨妙國土令生欣心」(同上、二三四頁下)などを挙げることができる。

(25) 『大正蔵』第三十七卷、一七九頁上

(26) 「此經是其頓教法輪。何故得知。此經正爲韋提希說。下說韋提是凡夫。爲凡夫說不從小入。故知是頓。」(『大正蔵』

第三十七卷、一七三頁上

(27) 前掲註(2)参照。

(28) 「忍具有五如仁王經說。一是伏忍在於種性解行位中學觀諸法能伏煩惱故名爲伏。二是信忍二三地於無生理信心決定名爲信忍。三者順忍四五六地破相入如趣順無生名爲順忍。四無生忍七八九地證實離相名無生忍。五寂滅忍十地已上破相畢竟冥心至寂證大涅槃名寂滅忍。今言無生是第四門。下文宣說韋提希等得無生忍即其事也。」(『大正藏』第三十七卷、一七九頁上)

(29) 「言心歡喜故得忍者。此明阿彌陀佛國清淨光明忽現眼前。何勝踊躍。因茲喜故即得無生之忍。亦名喜忍。亦名悟忍。亦名信忍。此乃玄談。未標得處。欲令夫人等惇心此益。勇猛專精心想見時。方應悟忍。此多是十信中忍。非解行已上忍也。」(『大正藏』第三十七卷、二六〇頁下)

(30) 九品段において、吉藏は「無生有二處。一初地無生。二七地無生。」(『大正藏』第三十七卷、二四四頁下～二四五頁上)と述べている。一方、韋提希の得忍後の位について、正木晴彦「勝鬘と韋提希」(『宗教研究』第四十一卷第一輯、日本宗教学会、一九六七年、七二頁)では九品往生人に当てられた階位に基づいて、吉藏は「七地無生」と見ていたものとされている。しかし九品段とは別の問題であり、言明されていない限り直接結びつけることには疑問が残る。また、同様に得忍後の階位を定めている論考は、所見の限りでは他に見られなかった。

(31) 吉藏の場合、他の一切衆生も含めて、全体として往生業が如何なる者のために説かれたかは、「説無量壽觀爲福德深厚人。」(『大正藏』第三十七卷、一三七頁上)ともあり、更に「三福」や「九品段」との関係も含めた広範囲な問題であるため、ここで挙げることは避ける。しかし、『觀經』が凡夫としての韋提希に対して説かれているとすることは、見てきた通り明らかである。

(32) 前掲註(4)参照。

(33) 善導『觀經疏』『女義分』(『大正藏』第三十七卷、二五一頁中)、及び「散善義」(同上、二七七頁下)

(34) 「佛告阿難下正作果觀中爲二。第一觀依果竟。今此下去第二觀正果。前依果觀有兩。一觀方便二觀正體。今正果體觀亦二。第一明觀方便。第二辨觀正體。今則初觀方便復爲四。」(『大正藏』第三十七卷、二四三頁中)

(35) 『大正藏』第三十七卷、二四三頁中

(36) 『大正藏』第三十七卷、二六五頁下

(37) 「由佛勸韋提求見故令彼佛菩薩俱現。」(『大正藏』第三十七卷、一七九頁下)

(38) 「正明韋提實是垢凡女質不足可言。但以聖力冥加彼佛現時。得蒙稽首。」(『大正藏』第三十七卷、二六六頁上)

(39) 『大正藏』第三十七卷、二四三頁中

(40) 「觀方便」は、初觀全体と第二觀の冒頭にも当てられているが、今の場合と用いられ方が異なる。ここでは、仏・菩薩が手だてを講じて出現したのと同時に、韋提希も意図を持って觀ずる手だてを講じたものと言うことになる。

(41) 善導の意図の本質は、十六觀によるものでは無いと言うことになるであろう(藤田前掲書、八二頁、及び八六頁参照)。

(42) 「時阿闍世問守門者下第二明執母因縁。如文。(中略)大初遂不受諫便斬其首。今世王猶可得諫。便退不殺母繫之深宮也。由繫之深宮故得念佛。念佛故得見釋迦及無量壽。此則是大利益事善權方便。若不爾者無由得說此一經也。」

(『大正藏』第三十七卷、二三九頁下)

(43) 『大正藏』第三十七卷、二四〇頁上、二四行目、中、一一行目

(44) 『大正藏』第三十七卷、二四一頁上、二六行目、中、一二行目。ここでは、釈迦牟尼仏の説法と阿闍世の行為とが、



同等に受け取られている。

(45) この他に、別序そのものの説明で「所化別序」の中における「惡事別序」の例として、阿闍世の惡行に伴う開經までの流れが示されている（『大正藏』第三十七卷、二三九頁下、一五行目〜二四〇頁上、一五行目）。ただし、ここに述べられているのは単に別序の説明を意図しているものである。そのため、内容は「論緣起第六」と同じであつても今検討している本迹二門や三聖との関連においては、さほど取り上げるまでも無い。

(46) 『大正藏』第三十七卷、二三五頁下

(47) 「汝今知不。阿彌陀佛去此不遠。汝當繫念諦觀彼國淨業成者。我今爲汝廣說衆譬。亦令未來世一切凡夫欲修淨業者得生西方極樂國土。」（『大正藏』第十二卷、三四一頁下）

(48) 『大正藏』第三十七卷、二四一頁中

(49) 『大正藏』第三十七卷、二四二頁上

(50) 『大正藏』第三十七卷、二三四頁中

(51) 『大正藏』第三十七卷、二三三頁下

(52) 「善哉韋提希者第三歎問。前雙告今雙歎。所以歎韋提希問者。其問故現得無生忍稱佛心。又由其問故宮內綵女發菩提心。復稱佛心。以稱佛心故歎其所問也。又其問得近利現在復益未來。自利并他現益及未來益。爲是義故嘆云快問斯事也。」（『大正藏』第三十七卷、二四二頁上）。ここでの「快問斯事」は、經文の流れからも未來世衆生と密接な關係があることは明白であり、吉藏もその様に「自利并他現益及未來益」と述べている。ただし、吉藏は「快問斯事」としているが、經文は「斯」では無く「此」である。

(53) この他に、釈迦牟尼仏の方から未來世衆生を取り上げているものでは、第三觀の中に指摘することができる。ただ

し、そこでは阿難に未来の教化を命じていると説明しているのみである（『佛告阿難汝持佛語者。前明三種觀竟。今命持者傳化未來也。』『大正藏』第三十七卷、二四二頁下）。一方で、韋提希の方から未來世衆生のために請い求めているところでは、単に未來世衆生のために問いをなしていると述べるにとどまっている（『時韋提希白佛言下第六章提希重問。此問意者我今者以佛力故得見土。若佛滅後衆生云何得見。爲未來衆生重問也。』同上、中）。これらからは説法の対象としての未來世衆生や、或いは方便としての韋提希の立場を表明している様な特徴的な解釈を伺うことはできない。

(54) 『大正藏』第三十七卷、一三五頁上～中

(55) 『大正藏』第三十七卷、一三五頁中

(56) 吉藏の分科によれば、經文の「時韋提希見佛世尊。自絕璎珞舉身投地。號泣向佛白言。」（『大正藏』第十二卷、三四一頁中）以降を正宗分としている。ここは、釈迦牟尼仏が王舍城に現れた直後の場面である。そして、これから韋提希と釈迦牟尼仏とのやりとりが始まり、實際に説法がなされる。これについての吉藏の注釈は、正宗分の内容に対する細分を示しているに過ぎない（『大正藏』第三十七卷、二四〇頁下、二二～二七行目）。しかし、釈迦牟尼仏とのやりとりで当たって厳密に序分と正宗分を区切り、これ以後に「淨土が明かされる」としている。